

「民族学者 梅棹忠夫の眼」

よしだ けんじ
吉田 憲司
民博文化資源研究センター

民博を創設し、初代館長を務めた梅棹忠夫は、その生涯において地球上の各地を歩き、世界の諸民族の生活をフィールド・ノートに丹念に記録するとともに、人びとの姿をカメラにおさめた。「写真はフィールド・ワークのための武器として欠かせないものだ」と梅棹はいう。梅棹の明晰な文化論も壮大な文明論も、この地に足のついたフィールド・ワークをもとに築きあげられたものにほかならない。

一九八二年の段階で、梅棹忠夫は、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら四六点を選び、東京銀座のニコンサロンで、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を開催した。その写真展は、その後、二〇一〇年までのあいだに国内各地六カ所で開催された。梅棹自身、「この写真展でわたしがしめたかったのは、これらの写真がすべて民族学の

フィールド・ワークの産物だ、という点であった」と述べている。

一九七三年以来、日本写真家協会の会員でもあった梅棹は、民族誌写真について独自の見識をもっていた。「わたしがつくっているような民族誌写真には、かならず言語情報が付加されていなければならないとかんがえている。……学術写真は映



企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」展示風景

像情報と言語情報との合成物である。こういうかんがえから、わたしはニコンサロンでのわたしの作品に對しても、全部について、みじかくはあるが説明文をくわえた。」

特別展「ウメサオタダオ展」の開催にあわせて公開することにした今回の企画展(六月一四日まで)では、その説明文も含め、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を再現している。民族学者・梅棹忠夫が、カメラ・レンズを通して「眼」をこらした世界。その世界をあらためてみつめなおそうという試みである。

展示場に並ぶ四六点の写真とその説明文を眺めてみると、梅棹が、常に、人と人、集団と集団、あるいは人間と家畜の「関係性」を意識しながらカメラのシャッターを切っていたことが読みとれる。たとえば、一四ページ右下の写真は、一九八〇年に中国で撮影されたものであるが、



漢族。中華人民共和国上海特別市虹橋人民公社にて。(1980) 写真：梅棹忠夫 ※説明文は、本文参照

梅棹は説明文でつぎのようにいう。「漢族。中華人民共和国上海特別市虹橋人民公社にて。中庭をかこんで二棟の家屋に、四世代一八人がいっしょにすんでいる。中央の老婦人が第一世代で、一家の中心的存在。ただし、炊事、食事は各核家族にわかれている。一家には、農業従事者もあり、工員もいる。(一九八〇)」

写真にとらえられた人びとの表情は、みなやわらかく、微笑みをたたえたものも多い。十分な人間関係ができてから、はじめてカメラを構えたことがうかがわれる。

梅棹が一九八六年に失明するまで愛用していたカメラは、バッグとともにそのまま残されている。カメラはニコンF2フォトリックAS。カメラには五〇ミリの標準レンズが装着され、バッグのなかには、ほかに二三ミリの望遠レンズが収められていた。しかし、展示されている写真の大半は、望遠ではなく、標準レンズで撮影されたものである。自身の目に見える、その大きさのまま

まに対象をとらえようとしていたことがわかる。そういえば、いつだったか、梅棹と写真の話をしていたときに、梅棹がこういっていたことが思いだされる。

「民族誌写真として、人の生活や、立っている人を撮影するときには、しゃがんで撮ってはいけない」

つまり、わたしたちが人と接するときの視線と同じ位置に、カメラも構えなければならぬというのである。標準レンズの使用とともに、人びとの世界を等身大にとらえようという梅棹の姿勢が改めて確認される。

梅棹は、彼がその研究生生活を通じて世界各地で撮影した約四万点の



梅棹忠夫愛用のカメラとバッグ

写真を、著作権も含めて、生前にすべて民博に寄贈した。民博では、その公開に向けて、現在それらの写真のデータベースを進めている。

企画展示場に並ぶ四六点の写真は、そのなかから、梅棹自身が選びだして、個展という形で世に問うたものである。そこには、民族学者・梅棹忠夫のまなざしが明瞭に刻印されている。そのまなざしを振り返る今回の企画展は、同時に、民族誌写真の意味、つまり文化を異にする人びとと写真を通じてかわることの意味と重みを、あらためて見つめ直す機会でもある。

写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」開催一覧

写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」は、これまで、以下の7会場で開催されている。今回の企画展は、その展覧会を民博の企画展として再構成して公開したものである。

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| ① 銀座NIKON SALON | 1982年10月26日-10月31日 |
| ② 大阪NIKON SALON | 1982年12月9日-12月15日 |
| ③ 千里ニュータウン開発記念室「ギャラリー」 | 1983年1月17日-1月31日 |
| ④ 神戸市立博物館 | 1983年3月15日-4月10日 |
| ⑤ 白馬村多目的ホール | 1983年7月25日-8月7日 |
| ⑥ 大阪WTC コスモタワー JICA ギャラリー | 1997年9月12日-10月12日 |
| ⑦ 信濃毎日新聞社本社ロビー | 2010年5月17日-6月5日 |

特別展「ウメサオタダオ展」関連・写真展
企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」
会期：6月14日まで開催中
会場：企画展示場A



チベット族。ネパール王国カトマンズ市郊外、スワンボナート寺院にて。チベットのダライラマのラサカからの脱出にともない、多数のチベット人が国外に流出した。カトマンズにもかれらの居留テント村が出現し、ラマ教寺院を中心に商業活動もさかんにおこなわれている。写真はチベット族の母子。(1961) 写真・文：梅棹忠夫

